
~ The iDOLM@STER produce freedom ~ **Pとアイドルの不思議な日常**

3MX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・M・P・F \ The iDOLM@STER produ
ce freedom \ Pとアイドルの不思議な日常

【Nコード】

N9465Y

【作者名】

3MX

【あらすじ】

またまた忍が現れた
今度の世界は『The iDOLM@STER』忍よ。お前の力で
トップアイドルを育て上げよ

きらめく舞台へ

さらなる高みへ

いまこそ駆け上がれ

『I・M・P・F』The iDOLM@STER produ
ce freedom』Pとアイドルの不思議な日常』

始まるよ

第一話 ～Pになります～

うっす！

みんな、元気にしてるか？

俺のことは知ってるよな

そう『忍竹薫』だ

何故か分からないが

気が付いたら知らない家にいた。その家の表札には『忍竹』と書かれてた

それよりも、どうやら今日は高校の入学式らしい

なぜそんなことを言うのかって？俺が高校生になるからじゃないか

月日が経つのはあっという間である

そして三年間が過ぎこの度、高校を卒業する事になりました

まあ、いろんな所にいって

かなりのハイスペックとなった自分には高校というのはかなり退屈なモノでしかなかった

普段、授業は寝ているのに点数をとれるのを妬まれたりしたが、流石スルースキルはA+といったところかな

喧嘩とかはしたけど、とりあえず俺の勝ちは確定していた

喧嘩をふっかけてきた奴にグラットンを見せると『すいまえんでした。許して下さいあ；；』とプリケツ土下座で謝罪をしたから許してやると勝手に俺の家来になっていた

高校では一種の伝説になっていたらしい
卒業後に知ったがな

家は一人暮らしだから家具や食器、洗剤とかは最低限ある
それに麻帆良での稼ぎと魔法世界での稼ぎがあるから、このまま遊んで暮らせる
だからとはいえ、何か仕事を探さないとな

家は都心にあるから、歩いて探すのもありだなんてか高校生活であまり都心には行ってないから散歩ついでに見てくるか

〈都心散歩中〉

『離して下さい』

『やめて下さい。嫌がってるじゃないですか』

『釣れないなあ。ちょっとくらいいいじゃん』

やれやれナンパですか

俺がチラッとナンパ師をみるとソイツは俺の知り合い（名をヤス）

だった

また強引に誘おうとしてるのか…やれやれ

「そこまでにしてやれよヤス」

『誰だ！って忍の兄貴じゃないっすか！？』

「久しぶりだな。といっても卒業式以来だから5日ぶりか」

「そうっす。その兄貴は何の用でここに」

「いやな、嫌がっているのにしつこいナンパにちょっと説教をしに来たんだ」

「うっ…すいません」

「前にも言っただろ。女性は優しく接してやるのだったな。悪いな、コイツにはキチンとお仕置きしとくから、ほらどっか行った」

『は、はいい〜』

『ありがとうございます』

カカカッ

「でヤス。いくら気が弱そうな女の子だからって無理やりはよくねえ。男としての器が疑われる分かったか」

「へい！」

「もう強引なナンパはするなよ。じゃあな」

「兄貴、ありがとうございます」

俺は手だけ軽く振ってヤスと別れた

さて、適当に歩くか

移動カッツ

『おお、その君。少し時間いいかい』

突然、オジサンに話しかけられた

「いいですけど」

俺はオジサンにスタブに連れてかれた

「いや〜いきなり話しかけてすまなかつね。私はこういつ者だよ」

何々？アイドル事務所765プロ社長 『高木』

へえ〜社長さんか

でも俺なんか何の用だ？

「いやいや。こちら時間も有り余ってたので」

「そうか…早速で悪いけど君、プロデューサーをやってみないかい？」

第一話 ～Pになります～（後書き）

『ネギまー！』に詰まったら書く感じですのであしからず

第2話 突然ですかPです（前書き）

この小説について説明を忘れた

この小説は無印でも2でもなく完全オリジナル
ニコニコ動画とかであるノベマスとかと同じようにオリジナルスト
ーリーである

詳しいことが決まり次第
前書きに載せる

第2話　〜突然ですかPです〜

皆さん、この度は俺はプロデューサーになりました

はい、拍手！

で、今は高木社長の事務所
765プロに来ています

どうやら俺の紹介らしい
気配的に社長を含めて13人いるな…人はいるけど売れないといっ
た感じだろう

『オホン。いきなりですまなかつたね。実はみんなに重大なお知らせがある』

扉の向こうがざわつきだす

『紹介しよう。我が765プロの新しいプロデューサーを、はいっ
てくれ』

社長の紹介で事務所に入る

『彼は忍竹薫君。我が765プロ希望の新人だ』

「どうも忍竹薫です。まだ何も知らないですが宜しくお願いします」

「それじゃあ、まず君の面接兼ミーティングを始める。まあ連れてきてしまったとはいえ履歴書を書いてはくれないか」

「あ、はい」

これはカットであって手抜きではないから勘違いするなよ

忍竹「出来ました」

俺は事務員のような人に履歴書を渡す

?「はい。……………!?!」

(しゃ、社長)(ヒソヒソ)

社長(なんだね音無君)(ヒソヒソ)

音無(この方、もしかするとかなりの掘り出し物ですよ)(ヒソヒソ)

社長(そうか、やはり私の目に狂いは無かったか)(ヒソヒソ)

音無(採用でいいですよね?)(ヒソヒソ)

社長(元々、そのつもりだけどね)(ヒソヒソ)

忍竹「あの……」

音無「は、はい!」

忍竹「で、どうですか？」

社長「オホン。それは私から伝えよう。忍竹君、ようこそ765プロへ」

忍竹「ありがとうございます」

社長「こういってはなんだが我が765プロはまだまだ弱小プロダクションだからね。君のような人材は喉から手が出るほどほしいのだよ」

忍竹「そうですか……」

社長「うむ、ではミーティングを始める。まあ自己紹介と質問とかで構わない」

（応接室）

社長「では改めて自己紹介させてもらおうとするよ。私は765プロの高木順一郎だ。これから、長い付き合いになるけれど頼んだよ忍竹君」忍竹「はい」

音無「私は音無小鳥と申します。主にデスクワークを担当しています。わからない事がありましたらいつでも聞いて下さいね」

忍竹「お願いします。次は俺だな。今日からプロデューサーになった忍竹薫だ。好きに呼んでくれ」

社長「それじゃ、春香君からお願いしようかな」

天海「はい！私、天海春香っていいいます。子供の時からアイドルになりたくて頑張ってます」

忍竹「よろしく。春香」（このメンバーでは：普通といった感じだな。強いて言うなればツツコミもボケも両方できる万能型といったところか）

真「僕は菊地真です。僕はよく男の子と間違われやすいんですけど、みんなに女の子って思ってたんで買いたくてアイドルになりました」

忍竹「何を言っている？こんな可愛い子が男の子の筈ないだろ？てか、さつき会ったな。アイドルだったんだ」（だが真はぱつと見だと男の子と思われるかもな。ダンスとか得意そうだ）

真「（ボフィン）／＼／」（男の人に初めてか、可愛いっていわるた）

やよい「私、高槻やよいね。プロデューサーさん、お願いしますね」

忍竹「元気があつてよろしい」（元気印といったところかな。太陽や向日葵といったものを感じる。だが、まだまだ子供だし、ダンスや歌が上手くはないかもな）

忍竹「ところで音無さん」

小鳥「はい。なんですか？」

忍竹「さつきからあそこでチラチラとこっちを見ている子は……」（あの子、さつきの子だ）

小鳥「ほら雪歩ちゃん。大丈夫だから、ね」

雪歩「はううゝわ、私、萩原雪歩って言います」

忍竹「あ、あのゝ」

雪歩「ひうっ!?!」

忍竹「さっきは悪かった。俺の知り合いが失礼したみたいで」

雪歩「そ、そんなことはないです。ただ、私、その…」

小鳥「雪歩ちゃんはちよつと男性が苦手なんです」

忍竹「そうだったか。悪かったな、無理して近付かなくていいから、少しずつ克服すればいい」

雪歩「大丈夫です。プロデューサーさんなら…／／／」（やつぱりさっきの人だ。ナンパさんと仲が良かったから恐い人かと思っただけ、優しそうな人でよかったです。それにちよつとカッコよかったですし）

忍竹「そうか。頑張ろうな」（男が苦手か…この業界だと確実にネツクになるな。まずはそこをなんとかしないと。それにこの辺で萩原といえば萩原のおじんの子か！萩原のおじんとこの奴とドンパチしたときはビビったぜ。チャカ出してくるしな。今度、挨拶にでも行くか）

伊織「やっと私の番ね！待ちくたびれたわ」

忍竹「順番だからな。それより自己紹介をしてほしい。俺は君のことを知らないから」

伊織「この私を知らないってどういうこと!？」

忍竹「初対面の相手は誰だって知らないから」

伊織「まあいいわ。私は水瀬伊織よ。アナタはプロデューサーになるんだったら覚悟しなしね」

忍竹「お手柔らかに」(お嬢様気質。優雅独尊。傍若無人といった言葉が頭をよぎった。私中心に世界が回ってるとか言い出しそうだな)

忍竹「次はそこの双子」

亜美・真美「待ってましたー!」

亜美「亜美達はね!これでも大人の女性なんだよー」

真美「お兄ちゃんなんか一撃ノックアウトなんだぞー」

忍竹「うるせーマセガキだな。ガキはどっかで遊んでろ」

全員「えっ!？」

忍竹「てのは冗談だ。よろしくな」(冗談とは言ったがマセてるだろだろこの双子)

亜美・真美「はーい」

次は…

千早「如月千早です。歌が好きでアイドルになりました。私はこの歌でトップに立ちたいです。お願いします」

忍竹「おう！初めてだが任せろ」（歌に全てを注いだといったところだろ。でも何だか、心に深い悲しみ…いや、恐れに似たような者を感じる。訳ありと来たか）

千早（どうしてだろう。この人になら着いていける気がする）

律子「それじゃあ、順番的に私ね。私を秋月律子。プロデューサーが来るまで、事務や仕事を受けたりと臨時プロデューサーをしましたが、プロデューサー殿が来てくれたのでアイドル一筋でやらせていただきます」

忍竹「えっと待ってくれ。今までって事は俺以外にプロデューサーはいないのか？」

律子「ええ。だから頼りにしてますよプロデューサー殿」

忍竹「はあ」（うん薄々は気付いていたが、圧倒的なプロデューサー不足か…律子ならいける気がするが本人がアイドル志望ならそれを手伝ってやるか）

忍竹「その眠り姫は後にして、続けて」

あずさ「私、三浦あずさと申します。プロデューサーさん。これからよろしくお願いしますね。フフフ」

忍竹「こちらこそ」（あずさんはおっとりしてるな、でもどこか抜けてるような、天然というか、とにかく気を付けよう。絶対に迷子になりそうなタイプだし）

忍竹「そんじゃ最後は、そこで寝ている子だな。すまないが起こしてくれ」

春香「あ、はい。美希、起きて」ユサユサ

美希「…ん？春香…おはようなの」

春香「おはよう、起きて。ほらプロデューサーさんに挨拶して」

美希「プロ…デューサーさん？」

忍竹「俺のことだ宜しく」

美希「美希はね。星井美希って言うの。好きな食べ物はおにぎりなの。美希はね、胸が大きいからアイドルになったら人気でるかなっておもってるの。よろしくねプロデューサーさん」

忍竹「ああ」（確かに顔立ちや身長から察するに千早や春香と同じぐらいだろ。だが2人よりもスタイルはいいし、性格的に体力もある。ビジュアルも中々…素材としてはいいんだが直ぐにドコでも寝そうだから怖いな…）

社長「みんな、各々紹介はおわったかな。それでは、本日はこれにて解散とする。ああ、忍竹君は少し残っててくれ」

忍竹「分かりました」

社長「ふむ。では気を付けて帰るよつに」

全員『お疲れ様でした^^』

忍竹「気を付けるよ」

……………続く

第2話 ～突然ですかPです～（後書き）

次回

『I・M・P・F』The iDOLM@STER produ
ce freedom』Pとアイドルの不思議な日常』～俺と社
長とお隣さん～

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9465y/>

I・M・P・F ~ The iDOLM@STER produce freedom ~ Pとアイドルの不思議な

2011年12月2日00時50分発行